

社会科における学びの構造転換の実現に向けて

1 学びの構造転換とは何か

(1) 学びの構造転換の基本的な考え方

学びの構造転換は、以下の三側面から、学びの在り方をもう一度考え直そうとする取組である。

側面	これまで	これから
① 授業の主体	教師	学習者
② 学習の過程	一斉・一律	個別・多様
③ 教師の役割	あらかじめの教授	後追いの支援・共同探究

これらの転換により、子どもたちに、以下の三つの力を育むことを主たる目的とする。

① 真の主体性	人生と社会の主体として、自ら行動を起こす意志
② 多様包摂性	違いを認め、共に生き・生かし合おうとする意志
③ 学び方	必要な時に、必要なことを、自ら学び身に付ける力

(2) 学習指導要領の基本的な考え方

平成29年3月告示の学習指導要領は、従来の「学習内容（何を学ぶか）」に重きを置く「コンテンツベースの学び」から、「資質・能力（何ができるようになるか）」に重きを置く「コンピテンシーベースの学び」への転換を目指すものである。

育成を目指す資質・能力は、その柱を、以下の三つに定めている。すなわち、学習内容を通して資質・能力の育成を目指すのが、これからの学習指導要領の基本的な考え方である。

① 生きて働く「知識・技能」の習得
② 未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力等」の育成
③ 学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力・人間性等」の涵養

(3) 学びの構造転換と学習指導要領の関係

学びの構造転換の理論体系は、学習内容を通して資質・能力を育成するために必要な「学習方法（どのように学ぶか）」について、教師の手だてをつくり出すうえでの基本的な「考え方」を提供する。

教師は、学びの構造転換を実現するために、学びを「個別化」「探究化」「協同化」し、三者の「融合」を図るための手だてを考える必要がある。

① 学びの個別化	学習者の自己選択の機会を最大化し、自己決定で学びを貫かせること
② 学びの探究化	もっと・より以上の成長を目指し、じっくりと学びに浸らせること
③ 学びの協同化	違いを認め、共に生き・生かし合いながら学びを進めさせること

学習者は、何もかもを自分で選んで決めて取り組むからこそ、もっと・より以上の成長を求めて探究に浸る。その過程で、自分だけでは乗り越えられない壁にぶつかるからこそ自ずと協同し、どんな時に、どんな人と、どのように協力すればよいかについても経験を積み重ねていく。

よって、個別化・探究化・協同化を融合した学びの構造転換の基本的な学習展開は、「自分で選び決め、探究に浸り、協同して共に生き・生かし合う」ものとなる。各教科においては、先述の学習指導要領の基本的な考え方を踏まえ、この学習展開を具体化することが必要になる。

2 社会科における学びの構造転換とは何か

(1) 学習指導要領が定める社会科の目標

小学校と中学校の学習指導要領では、社会科の目標を、以下のように定めている。

<p>社会的な見方・考え方を働かせ、課題を追究した解決したりする活動を通して、</p> <p>小学校社会科</p> <p>グローバル化する国際社会に主体的に生きる平和で民主的な国家及び社会の形成者に必要な</p> <p>中学校社会科</p> <p><u>広い視野に立ち、</u></p> <p>グローバル化する国際社会に主体的に生きる平和で民主的な国家及び社会の形成者に必要な</p> <p>公民としての資質・能力の基礎を育成することを目指す。</p>
--

(2) 教科等の特質に応じた見方・考え方

「社会的な見方・考え方」は、以下のように定められている。

<p>小学校社会科</p> <p>社会的事象を、</p> <p>位置や空間的な広がり、時期や時間の経過、事象や人々の相互関係などに着目して捉え、</p> <p>比較・分類したり総合したり、地域の人々や国民の生活と関連付けたりすること</p> <p>中学校社会科</p> <p>地理的分野（社会的事象の地理的な見方・考え方）</p> <p>社会的事象を位置や空間的な広がりに着目して捉え、</p> <p>地域の環境条件や地域間の結び付きなどの地域という枠組みの中で、人間の営みと関連付けること</p> <p>歴史的分野（社会的事象の歴史的な見方・考え方）</p> <p>社会的事象を時期、推移などに着目して捉え、</p> <p>類似や差異などを明確にしたり事象同士を因果関係などで関連付けたりすること</p> <p>公民的分野（現代社会の見方・考え方）</p> <p>社会的事象を政治、法、経済などに関わる多様な視点（概念や理論など）に着目して捉え、</p> <p>よりよい社会の構築に向けて、課題解決のための選択・判断に資する概念や理論などと関連付けること</p>

※見方：事象に対する「問い」や「課題」を見いだすための着眼点

※考え方：着眼点の下に建てた「問い」や「課題」を解決するための思考過程

※問い：直感的な疑問 ※課題：解決する目的や方法を明確にした問い、「学習課題」や「学習の問題」と同義

(3) 社会科における学習展開の基本形

以上から、社会科では、学習展開の「基本形」を、以下のように定めることができる。

社会的事象との地理的及び歴史的、並びに公民的な出会いから、市民社会の世界大の広がりより一層の成熟に向け、自分なりの問いや課題を見いだす。その解決のために、社会的な見方・考え方を働かせながら、自分たちなりの方法で探究する。

ア 社会参画と社会形成の主体となるための学び

社会科を通じた学びの「目的（何のために学ぶのか）」は、教科の目標や内容の分野間の関係からも明らかのように、「よりよい社会の構築」にある。この「よい社会」とは、近代以降においては、各人の「自由」と人々の「相互承認」を基礎とし、「よさ」の規準を「一般意志（全ての人の合意＝相互承認）」と「普遍福祉（全ての人の幸せ＝自由）」に求める「市民社会」を意味する。

すなわち、社会科の学習過程は、第一に、社会的事象を、「どの場所にあるのか・どのように広がっているのか」「なぜ始まったのか・どう変化してきたのか」「どのようなつながりがあるのか・なぜ協力が必要か」といった空間・時間・相互関係による多面的・多角的な視点で捉えていく。その過程で、第二に、「どうしたら、みんなが納得したうえで、みんなが生きたいように生きられる社会が実現するのか」について自分なりの問いや課題を見いだし、自分たちなりの方法で探究することが基本形になる。

一人一人の児童生徒が「自分なりの問いや課題を見い出すこと」は、社会を、「与えられたもの・変えられないもの」から「つくり出すもの・変えられるもの」と捉え直していく活動でもあるから、「社会参画の主体」になるための基礎的な経験になる。見いだした問いや課題を「自分たちなりの方法で探究すること」は、学校や学級、その中で学習集団という「小さな社会」をつくる活動でもあるから、「社会形成の主体」になるための基礎的な経験になる。

イ 社会科としての広く深い学びと教師の役割

そして、このような学習展開は、結果として、「社会的事象についての知識」をよりよく理解することにもつながる。

知識は、一般に言って、自分が強く解決を望む問いや課題と関連付くほど、「意味」や「価値」が広く深く認識される。「何のために・どのように役立つのか」についての実感を伴う、「生きて働くもの」として習得されるということである。また、複雑で多様な要因が絡み合う「現実の状況」下で問いや課題の解決に活用された知識は、「未知の状況」においても、自分なりに・自分たちなりに思考・判断・表現しながら探究することを支え、「自ら知を学び取る学び方」の一部となる。

ここに、これまでの、「順序よく強弱を付けながら、手だてを懲らして興味・関心を引き立てるよう計画的に知識を教える」展開を、学びの構造転換の考え方にに基づき、「自分なりの問いや課題を見いだし、自分たちなりの方法で探究する」展開に転換する社会科としての意義がある。

児童生徒が主体になるほど、問いや課題、解決の方法や過程は個別化・多様化する。このとき、教師は、後追いを基本姿勢とし、学習課題を個々が建てる際に、分野の特質に応じた見方・考え方を明示的に指導することで追究すべき「共通の条件」としたり、解決の過程で「ポイントレッスン」を行い、事実を客観的かつ公正に認識できるよう諸資料を使って多面的・多角的に考察することを促したりする。また、市民社会の広がりや成熟に向け、現代社会の課題を解決するために自分なりに考えた方法を、みなで合意し、他者の社会参画を促せるよう論理的に説明させたり、その過程で、用語・語句を適切に活用させたりすることも、学びを広く深くするために教師が果たすべき役割である。

3 実践事例

※本資料からは省略